

「神仙の人」

—宗教者の病跡学の一考察—

“The man of “Shinsen” (immortal)”

— A consideration of pathography of religionists —

大 宮 司 信

Makoto DAIGUI

1. はじめに

大本教は明治期に創立され、天理教とならぶ我が国のいわゆる民衆宗教の代表的存在である。出口日出磨（ひでまる）は、三代目教主補という指導的立場で活躍が期待され、前半生はその期待通りの活躍をした人物であったが、後に統合失調症となり、その後は大本教の表舞台には立たず、ひっそりとした人生をおくった。

日出磨が精神病であったことは、彼一人の問題に終わらず、大本教団全体にも、様々な影響を与えたはずである。もちろん大教団の中核中の中核にいる人物であるから、その動静を外から正確に知ることは不可能に近く、知りうることは、教団の発信した情報以外に把握困難である。

一方、彼が精神の病を得た後も教団にとどまり続けたことは、精神医学から宗教に接近しようとする立場からは関心を起こさせる存在である。教団活動から全くはなれて、一人の病者として生涯をおえたとすれば、大きな関心はもちろん起こってはこない。ところが後に述べるように、日出磨は一人の病者ではなく、大本教の少なくとも教義の上でその若き日に重要な意味づけをされているのである。本論考では、この輝かしい日の日出磨ではなく、後半生の病者として生きた日出磨を教団がいかに位置づけたかを中心に、宗教者の病跡学の一側面を考えてみたい。

出口日出磨の伝記は、例えば彼の発病前の著述を再編集した「生きがいの探求」, 「生きがいの創造」, 「生きがいの確信」の、いわゆる生きがい三部作に付された断片的な記述を別にするに2冊ある。

第1は日出磨の70歳の古希を記念して教団から昭和41年（1966年）出版された「出口日出磨先生小伝」（以下「小伝」¹⁾であり、第2は日出磨の三女聖子の婿、出口斎（いつき）によって平成元年（1989年）に、著者によれば、日出磨と直日の結婚60年の記念として出版された「神仙の人、出口日出磨」（以下「神仙の人」）である²⁾。

この二つの伝記には30年余という年月のへだたりに由来する違い（例えば、後者のほうが晩年の日出磨についての記載が多く、幼少期の記述が少ない）はもちろんだが、前者が記述の正

確を期そうとする筆致が強いのにくらべ、後者はより大本における日出磨の位置づけに腐心しているように読める。

本論考では、主にこの新しい伝記「神仙の人」にもとずき、一部は「小伝」も引用しながら、日出磨の精神のやまいが教団によってどのように意味づけられていったかを明らかにしたい。

2. 大本教の歴史

周知のように大本教は、開祖出口なおに「良の金神」（うしとらのこんじん）が神がかかって成立した宗教である。なおは自分だけに伝達される神の言葉を膨大な量の半紙に書き付けた。これを「お筆先」という。それに基づき、なおの五女で、第2代教主のすみの養子となり、実質的な教団の組織者となった出口王仁三郎が中心となって編集した「大本神論」を教典とする。

神道的な色彩が濃い「ミロクの世の建てなおし」という終末論的世なおしのスローガンは、現実の変革を意図したものであり、これが天皇制のもと、軍事大国をめざす政府の目には反逆的・国家転覆の計画として映るところとなり、大正10年及び昭和10年に大弾圧を被ることになる。

いずれも当時の政治的状況ゆえのいわれのない弾圧であったため、教団関係者の多くは長年月の裁判ののち、罪を免れているが、幹部の何人かは獄中で非業の死を遂げ、また京都近郊の綾部にある教団施設も徹底的に破壊された。しかし戦後、教団は再び教勢をとりもどし、施設も綾部を中心に再建築され、現在多くの信徒が集まっている。

3. 日出磨の個人史と教団での位置

出口日出磨（本名：元男）は、明治30年岡山県倉敷で仁科清吉、秀野夫妻の次男として生まれた。出生前から祖母の実家にあたる高見平次の世嗣として約束されていたことから、戸籍上ははじめから高見平次の長男、元男として登録された。

京都大学在学中から大本教に出入りし、教団内で文書および広報関係の仕事をしているうちに認められ、2代教主出口すえの娘、直日と結婚し婿入りする。これによって日出磨は教団の中核的な位置を占めることになり、全国各地はもとより、遠く旧満州にまで宣教活動をするようになる。

一風変わったところがあり、何を考えているか分からないといったところがある一方、人目につかず、誰よりも早朝に、神域内の掃除をするという場面もあったと伝えられている。2回の弾圧、特に昭和10年の第2回弾圧時、当時すでに年老いていた王仁三郎や第2世代の教団幹部たちよりも、日出磨達第3世代は弾圧の主要な対象となり厳しい取調べが行われた。

4. 日出磨の精神鑑定

大本への第2次弾圧は昭和10年に行なわれた。このときは教団幹部の逮捕だけではなく、教団施設の徹底的な破壊と、信徒への過酷な取調べが行われた。日本が15年戦争へとひた走る時代状況が弾圧の背景にあったことは想像にかたくない。また官憲の主要な対象が日出磨であったことも先に述べたとおりである。

ところで彼は、取調べの途中で奇妙な言動を呈するようになり、精神鑑定を受けることになる。京都大学精神医学教室の三浦百重が鑑定人となり、「精神分裂症」ないし拘禁反応という診断が下される³⁾。この鑑定結果から彼は釈放され、妻の直日が生活していた京都市の郊外に住むことになる。この三浦鑑定について以下に略述する。

最終的な診断は上述のように「精神分裂症」（現在の統合失調症）である。「佯狂」（詐病）は否定されるが、ただし「拘禁による精神分裂症的反応なるやもしれず」として、今日でいう拘禁性精神障害の可能性を記述し、「両者の鑑別は彼が拘禁をとかれ、自由を得たる暁に於いて始めて正確に決定し得るるものならん」としている。

三浦が精神分裂症の診断根拠にしているのは「その基本的症候たる自閉性と多価性」である。後者は「健康者に於いては一義なるべき精神現象が分裂して、統一を失ひ、多数の意義、相反する心情が同時に並存する状態」としている。これはE. BreulerのSchizophrenieの概念であり、現在の要素的精神症状の組み合わせによる診断基準とはことなる。鑑定書の記載によれば、幻覚はあまり明確ではなく、妄想についての問診記録もはっきりしない。しかし三浦は先に挙げた2種の「基本特徴を若干具有する」として精神分裂症と診断する。この三浦鑑定の結果は後述する日出磨の拘禁解放後の、そして日出磨の後半生からみて正しいと考える。

5. その後の日出磨：精神症状とその解釈

釈放された後も日出磨の激しい精神症状は続いた。大本はこれをどう見ていたのだろうか。彼の言葉と行動から記述する。

5-1. 予言

彼が発する言葉は、時に脈絡なく、また突然である。何を物語っているかはわからないこともある。これを大本では様々な予言であると理解する。個人におこったという簡単な例を見ておく。

昭和二十三年の夏である。やはりそばに仕えていた入江実次にたいして日出磨は大声で告げた。「実ちゃん帰れ!」。突然のことであった。入江は何か無礼なことがあって叱られたものと思ひ、傷心のまま播州の伊保村に帰る。帰省してみると、曾祖母が重病におちいていた。入

江は臨終にあうことができたのである。(神仙の人：333～334頁)

日出麿が発したのは精神医学からみれば、精神症状の悪化による暴言であろう。しかしそれに従った入江には、後方視的にみれば曾祖母の臨終に間に合わせるための神の声になったのである。

5-2. 交霊

日出麿の主要な精神症状の一つは精神運動興奮で、周囲の者にも押さえられぬほどであった。大本はこれを神・悪霊等の様々な種類の霊とのやりとり、すなわち交霊として意味づけ、日出麿は何らかの霊と交信を行っているのだととらえる。

津田の姿をみた日出麿は「津田はん、部屋へ来な」と言う。津田はいそいそと別院の土間を通ってうしろにしたが、土蔵の六畳の部屋に控えた。ややあって那須が母屋の方に姿を消すと、隣の三畳間から「津田はん、肩もんでくれ」とのやさしい声がかかる。津田は「ハイ」と声を弾ませて日出麿の肩に手をかけた。寒いだけでなく、部屋のなかは殺風景そのものであった。調度品の一つもないわびしい部屋で肩をもむ。そのとき、「津田さんは箱根の生まれじゃったなァ」との言葉を聞く。覚えていたのである。津田は感無量となり、身体に強烈なしびれが走った。「津田はん、いくつになる」と尋ねた。津田はやつとのこと、四十一歳でございます、と告げる。日出麿はしばらく考えるふうであった。そして「何年生まれだ」とかさねて聞いた。明治三十七年でございます、と答える。しばらく間がとぎれ日出麿は、「そうか、わしは四十七歳になったか……………。えらいことはかなわんわい」としづかに、しかしはっきりと口にした。自分の年をかるうじて思い出したふうであった。昭和十一年の初頭以来、九年の歳月がながれていた。津田は「ご苦労さまでございます」と反射的に言う。日出麿は「アッハハハハ」と大きく笑う。それきり会話はつづかなかった。津田はこの日の問答を、生涯の思い出とする。そしてそれから数日後、日向の依頼もあって日出麿の側近に連なった。

その初日である。津田は、こんどはうってかわってきびしい目をした日出麿から、「貴公だれじゃ」とつめ寄せられた。言われた方は、ただおろおろするしかない。当然である。前日には慈愛のこもった言葉があり、覚えていてくれたことに感激した。それが一瞬にして吹っつんだのである。津田はドギマギした。すると今度は、拳骨が飛んできた。反射的に身構えると日出麿は「柔道か」と言い放ち、取って投げた。津田にとってはじめての日出麿の荒みはショックであった。この直後、ある先輩が耳うちする。「そんなときは、先生にお怪我でもあるといけないから、お詫びをして手を縛らせていただきなさい」。おそれおおいことと思いつつも津田はつぎの交霊のおり、手を縛ってみた。それから数日後のこと。日出麿が息吹きをしたり、立ったり座ったりなどした。交霊である。いらいらした様子であった。そして津田をみつめる。しばらくして両手を前に突き出して言った。「津田さん、縛ってくれ」。津田はびっくりした。

とんでもありません、もうお許してください、とあとずさりした。しかし、つぎの日出磨の一言を聞いてさらにおどろく。「わしは縛られた方が楽なのじゃ」。思いがけない言葉であった。津田は愕然とした。そして、涙のまじる声で詫びながら手をゆるく縛った。縛りながら津田は思う。ああ先生自身、交霊というものはどうしようもない現象なのだ。そして、これ以上はない苦しみを味わっておられるのだと。(神仙の人：305～307頁)

ここでは日出磨の精神症状が短期間で激変すること、周囲がそれを交霊と捉えていたことがうかがわれる。日出磨の行動は時に手をしばらなければならぬほどの荒れようであった。精神運動興奮を中心とする日出磨の症状は、教団にとっては神の業あるいは神の業を妨害する悪霊の仕業とされ、大本の教義である弥勒の世の建設における戦いと王仁三郎らによって解釈される。しかし一方で伝記は、こうした日出磨の行状すべてが大本的に解釈されたわけではなく、多くの信徒たちが日出磨は精神病なのではないかと考えたことも記述されている。つまり、教団の中における特別な存在と日出磨をみていた信徒らも、一面では精神病症状と考えざるをえなかったということである。

表面からだけでは狂人にみえた。しかし、こういう瞬間もあった。亀岡市御旗町（現古世町）の藤津進の夫人が、穴太の日出磨のもとにやってきた時である。藤津進は大本事件に連座して、生命をちぢめ、この年六月二十五日に五十二歳で昇天した。ちなみに、前述の高木鉄男も上野の自宅でその十日前に、獄中で身体を傷めたのがもとで息をひきとっていた。六十九歳であった。さて、藤津夫人は夫をなくし傷心していた。そして日出磨や大本の状態が、夫人にはあまりにもふがいなく思われた。長久館に来た夫人の目に映ったのは、うつろに座っている日出磨の姿である。もう我慢ならなかった。膝にむしゃぶりつき、泣きじゃくり、訴えるように言った。「どうして、こんなご状態に……。ほんとうに気が狂われたのでしょうか、どうかわたしにその本心をお示し下さい」。切迫した懇願であった。突きあげるようにしてのべた訴えであった。事件前の日出磨であってほしかったのである。この時、日出磨はこう応えた。「……………あなたの家に弔問に行かねばならないが、神業のためこの通りだから……………。どうかゆるして下さい」。「弔問に」と言った。「神業のため」とも言った。誰も耳に入れなかたにもかかわらず、藤津進の昇天を知っていたのである。

(神仙の人：287～288頁)

同じころである。亀岡在住の成瀬言彦はやはり王仁三郎を訪ね、「日出磨さまのご近状はいかがでいらっしゃいますか」と問う。王仁三郎はこんな答え方をした。それは、日出磨の行状はたんに警察の目をごまかすためだけのものではない、との内容であった。「あれはご苦勞なご用をしとるんやぜ。すこぶる力のある霊が邪魔ばかりするので、神さまがこれを改心させいと言わはるんや」。そして言葉を継いだ。「こいつを改心させるには、誰かの身体に憑かせて

修行させんならんが、誰にでもというわけにはいかん。まア、わしか日出磨しかあらへんが、わしの代わりに日出磨の身体に憑かせてあるんや。たいへんなご用やな。」

ついに気を許し、真相の一端を告げたのである。ところがである。一カ月後にも成瀬が同じことを聞いたとき、王仁三郎は前とはうってかわって日出磨のことをクソミソに言う。成瀬はその急激な変化におどろき、ただ茫然とした。その日、成瀬は一涙の落ちるにまかせ日記を書いた―と後年のべている。このままではとても気持ちがおさまらなかった。それからまた一カ月ほどして、成瀬は心を決して王仁三郎に三たび聞いた。「日出磨先生のご近状は………」と、王仁三郎の目をじっと見ながら、内心はビクビクしていた。王仁三郎は、「ウム、おんなじこっちゃ」とだけ言う。成瀬はそれだけではあとにひく気になれない。それが通じたのだろうか、王仁三郎は「もっとこっちゃへ来い。もっと来い」と近くに手招きした。彼は額があたるほどに近よる。そこで王仁三郎はおもむろに、低く、しかし力のこもった声で告げた。「いまにな。もう一度、上げもおろしも、行きも戻りもでけんときが来るんやぜ……。そのときがきたら、誰が出てアカヘンのや。日出磨だけじゃ。日出磨が神の威勢を出すのや。ほかには誰が出てアカン」それを聞いた成瀬は、感激のあまり涙があふれた。頬のぬれるのを気づかなかったという。さらに、日出磨の側近である南尊福夫人も王仁三郎に、日出磨のことを問いただしている。そのとき、王仁三郎はこう具体的に答えた。「大本の神様を妨害する悪魔が、わしを八つ裂きにして釜に入れ、殺そうとしたのがこんどの大本事件や。その悪霊がこれ以上、暴れないように日出磨の肉体につけてやったんじゃ。そのおかげで、わしは無事に刑務所から出所することができた。お前らに憑けようものなら半時も体がもたぬ。狂い死にしてしまう。日出磨だからああして保っておるのじゃ」。そして今後の状態については「日出磨の霊が勝っているときは様子がよいし、悪霊が勝っているときは荒れている。だんだん悪霊が改心するにつれて、日出磨もよくなるのじゃ」と見通した。(神仙の人：289～291頁)

日出磨の精神病状態は、信者、教団、そして王仁三郎には、このように、脈絡のない発言は世から超越した予言として、精神運動興奮は霊との戦いとして、切迫性をもってうけとめられたのである。

6. 日出磨はいかに位置づけられたか

平面に黒白の二色で書かれた「ルビンの図形」は、視点によってみえるものがことなっていく。もちろん図と地、あるいは前景と背景のどちらに視点に移すかによってかわるのであり、このような視点の変更が可能であれば、すべてのものはただひとつだけに見えることはない。精神の病いの場合も同じである。本論考の対象である出口日出磨の出来事も、精神のやまいとみる見方も大本的な見方も、そういった点では同等の権利をもつかもしれない。

もちろん大本は日出磨の出来事を、大本的・宗教的に描こうとした。しかしこの試みには、

上述したような一般論からではなく、もう少し具体的な理由があったように筆者には思われる。

教団は日出麿を「日の出神」として位置し続ける必要があったのである。その必要がなければ、やまいを負った日出麿を隠しておくという選択枝もあったと思う。この日出麿を「日の出神」として位置し続ける必要の背後には次の二点があったと筆者は考える。

第1に三代直日の養子である日出麿は、二代すみの養子である王仁三郎と同格の役割が与えられる必要があったであろう。この役割は本来なおの次男出口清吉がはたすはずであったが、彼は戦死してしまった。第2になおの第三女福島久子が自分こそが「日の出神」と言いだし、教団には分裂がおきようとしていた。

それでは「日の出神」とは何か。この神の属性や他の神との違いは実ははっきりしない。またその具体的な仕事や役割りもはっきりしない。「小伝」によれば次のように説明されている。

この日の出の神というのは、お筆先に、「出口直、出口王仁三郎、出口すみ、日の出神が三千世界の手柄をいたすぞよ。この日の出神があらわれ出たら、一度に開く梅の花、良の金神があらわれて、世界をよくしてやるのぞぞよ」(明治三十三年旧七月七日)と示されているように、二度目の天の岩戸を開いて、ミロクの世界を実現される、良の金神(出口開祖)坤(ひつじさる)の金神(出口聖師)金勝要神(きんかつかねのかみ)(二代教主)とともに、日の出神はその神業の中心となって活躍される「四魂の神」の中の一つのご神名(小伝:73頁)

つまり「ミロクの世界の実現」がこの神の仕事となる。出口直日と高見元男(日出麿の旧名)の婚儀は、こうした背景をもっておこなわれ、それはかれが「日の出神」として現れる契機になったのである。「神仙の人」は次のように伝える。

同夜の祝宴の席上、高見元男は王仁三郎によって、「出口日出麿(ひでまる)」と命名された。この命名には、大本神業上、重要な地位をしめる“日の出神(ひのでのかみ)”の内意が秘められていた。“日の出神”については、大本開教以来、大きな謎とされてきた。かねてから、「この出口と日の出神を土台と致して、天の岩戸を開いて、世界を神国の世に改めるのぞぞよ」(明治三十三年)と筆先にあり、さらに「出口直、出口王仁三郎、出口すみ、日の出神が三千世界の手柄をいたすぞよ。この日の出神があらわれ出たら、一度に開く梅の花、良の金神があらわれて、世界をよくしてやるのぞぞよ」(明治三十三年)と、くりかえし“日の出神”が登場した。ところが、その“日の出神”の役と神示されていた開祖の次男・清吉(明治五年生まれ)が近衛兵として出征し、日清戦争終結の直後に台湾で戦病死(明治二十八年)してしまったので、開祖なお、すみはじめ役員者の苦悩はつづいた。心配するなおの問いに、神は「出口清吉は日の出神となりてピチピチいたして帰りてくるぞよ」と告げた。さらに清吉の消息を尋ねると「ご安心なされよ」「言うにいわれぬ隠れ蓑、日の出となりて現れるぞよ」と答えるばかりであった。また「清吉は死んでおらんぞよ」と意味ふかい言葉をなげ、神は意味ありげ

に「ホッホッホッ」と笑ったという。死んでおらぬ、とは“死んでこの世にいない”と否定的にも、“死なないで生きている”と肯定的にも受け取れる。なおはそのどちらかをあらためて聞くが、神の答えは同じであった。さらに、「出口清吉殿は神が借りておるぞよ。真に結構な御ン方を借りまして、神の願望（おもわく）が出来（しゅったい）いたしたぞよ………」[日の出神を連れ帰りて、よき目ざましをいたして見せてやらんと………」といった筆先が出る。明治三十四年には、「寒き夜に嵐のひどき世になりて日の出の「もとを」（原文では付点）待ち兼ねるぞよ。これを判じて読みて下されよ」と神示された。「元男」（原文には「」はなし）が生まれて四年後のことである。

時がたち、昭和二年の高見元男の婿養子の発表後に、二代教主すみは神から、元男が“日の出神”の役であることを知らされる。また「三代もまた日の出神である。二人は同じ霊（みたま）で、夫婦になりて揃うたところで、あっぱれ日の出神と現れるのである」と神示に聞いた。このあとも、神秘にみちた事実がいくつかあらわれ、長年の疑問があざやかに解消されるのである。（神仙の人：124～125頁）

“日の出神”の因縁は、一般信徒にもくわしく披瀝された。役員、信徒のよろこびは大きかった。昭和三年二月一日の婚儀の日、全国の信徒は勇んで聖地に参集した。そして五日間にわたる文字通りの“大祝い”がくりひろげられる。開祖を通して“良の金神”が再現した日としてもっとも重要視される二月四日（閏年）の大本節分大祭は、日出磨が齋主になって“みろく殿”でおこなわれた。二代教主は祭典前に“日の出神”の真相をあらためて発表し、祝いの挨拶をおこなう。このころのすみの喜びようはたいへんなものであった。（神仙の人：126～127頁）

このように大本では、日出磨は予言された「日の出神」の出現とされ、それは彼が直日と結婚した時点で教団の公の宣言として位置付けられた。このことは彼が、他の人間で交代可能な幹部の1人ではなく、大本の教義の中の無くてはならぬ人物として位置付けられたことを指す。後になって彼が発病し、いわば余生的な生涯をおくるようになっても、教団が彼の存在を隠してしまう事が出来ない要因になったはずである。

従って精神病発症ののちの日出磨の言動はこの流れの中で意味づけられる必要があり、またそのように理解された。このような例を「神仙の人」から見ておこう。

あのようなお方がなぜ、そのようなご病気になられたのか—この疑問がみんなの胸に去来し、心を暗くさせた。地方には、“病気”としか伝わらなかったのだ。そして、中矢田の寓居に王仁三郎をおとずれ、面会できたよろこびとともに、この点をたずねた者も少なくなかった。しかし、戦況の予言や類まれなユーモアを連発する王仁三郎も、日出磨のことに触れると口をつぐんだ。素知らぬふりをし、回答を避けた。たまに言及する場合は「癒らぬ」とはっきり

断言し、信者の心をいっそう暗くさせた。それは当局のきびしい監視を考えての発言であったのかもしれない。保釈後もいささかの油断もならなかったのである。そしてこの王仁三郎の言葉により一日出磨先生の再起はむつかしいらしいとの風評が全国に伝わった。しかし王仁三郎は、ごく一部の人々には真意を告げていた。保釈から帰ってまもなくのことだ。日出磨の側近である石原には、小さな声でこうもらしている。「(神業は) いまは日出磨が六分、わしが三分、全国の信者が一分やっているのだ」また、日向良広が「日出磨先生が蛙や幽霊などの恰好をされるのは、どういうことでしょう」と聞くと、「お筆先に、“餓鬼や虫ケラまでも助ける”とあるが、日出磨はいま、蛙や蛇の霊までも救っているのだ。この世で、まだ迷っている幽霊も救っている。あらゆる霊を天国へ運び上げるのが、あれの使命なのだ」としんみりした口調で教えた。道院の道名“運霊”のはたらきを指して言ったのであろう。昭和十八年（一九四三）にすすんで春。甲府市の土屋達臣が王仁三郎に面会した。その帰り際に土屋が、もっとも気になっていたことを尋ねる。「日出磨先生のご病気は治らないものでございましょうか」王仁三郎の口からやはり一言の返事もない。土屋はかさねて聞いた。「日出磨先生のご病気は……」と。やはり黙したままだ。土屋は不安になった。機嫌でも悪くされたのか、たいへんなことを聞いたのか。これ以上の質問はやめようと思った。王仁三郎はしばらくの沈黙のあと火鉢のそばを立ち、おもむろに座敷机に向かった。そしてそこで一枚の色紙にすらすらと染筆する。そこには、この歌がしたためられてあった。

もつれたる世の糸口を握りしめミロクの機織る奴は何者

ミロクの機を織る奴はなに者……。土屋はこの歌の真意がもちろんわかった。ミロクの世（理想世界）建設にむかって神の仕組みの機を織っているという意味である。もうこの歌で十分であった。（神仙の人：287～288頁）

日出磨ははたして病気なのか、もう治らないのか、これは当時の信徒の等しく抱いた関心と不安であった。この記事では王仁三郎の理解を聞いた石原、土屋らの信徒が、精神の病気ではなく、大本の教えたるミロク世界の建設の中の一翼を担っているという説明を受け止め、感激している。王仁三郎の本心であったかどうかは定かではないが。

直日と結婚したときに与えられた「日の出神」という大本の教義の中における位置づけがあるために、教団としてはどうしても彼を精神病とだけみなしていくことができなかつた可能性がある。そこで教団は前述したように荒行・悪霊との戦いとしてとらえたと思われる。

こうした構図は、もちろん今に始まったことではなく、精神の病いの意味づけとして昔からありふれて存在していたものである。しかし日出磨の示すまとまりのつかない発言や精神運動興奮状態は、神の声を示すもの、霊の戦いとして、迫力を持って多くの人の目に映ったことであろう。

晩年の日出磨はこのような精神症状が静まり、世俗を超越した生活を送っている。見方によっては統合失調症者に見られる世と隔絶した姿をよく表わしているともいえる。「日の出

神」としての日出麿の前半生は、まさに「日の出」の人生であった。一方後半生は、それとは対照的に、伝記の名称「神仙の人」そのままに送ったように思う。

7. 本論考の対象はだれか、だれの病跡か

ある傑出した人物が、精神の病いをなんらかの契機として文学・音楽・絵画などの作品を生み出すとき、その作品、とくにその創造の過程から、作者の精神に肉薄し、できうれば精神の病いの本質や治癒の本質にせまろうとするのが病跡学であると筆者は考えている。この素朴な考えに立って、本論考の対象は何か、何者かを再度考えてみる。

手がかりとして取り上げた「神仙の人」が指し示す者は、日出麿であるから、かれの作品・作物を、同じくこの自伝から探し出し、日出麿の創造の過程を追うのが、本論考の場での病跡学的な方向である。

しかしその作業ははからずもこの伝記が日出麿の過半生を語るというよりも、むしろ「日の出神」（として日出麿）を語っているとでもいいうる部分が随所にみられるように思う。従って「神仙の人」という作品をあらわした大本教団という集団の病跡（そういう言い方が許されるなら）をこれまで考えてきたのかもしれない。

つまり、作者すなわち病跡学の対象（大本教団）が作品（「神仙の人」という伝記）を生む。生み出された作品（伝記）から作者（大本教団）の病跡・創造の過程を見い出そうという作業である。本論考は出口日出麿の病跡ではなく、大本教団の病跡なのかもしれない。

日出麿の前の世代に、実質的に組織者としての役割をはたし、何事もなければ、その役割を日出麿がつぐことになったであろう出口王仁三郎が躁鬱病圏の人物であったという説がある⁴⁾。それとは対置される精神のやまいを負った日出麿を終生舞台から下ろさなかったことにより、教団は平衡を保ったのかもしれないといった感慨もうかんでくるが、それは明らかにさるべき問題として残される。

【文献】

1. 大石 栄（梅松祭記念出版委員会編）：出口日出麿先生小伝．天声社，京都，1966
2. 出口 斎（編）：神仙の人，出口日出麿．講談社，東京，1989
3. 三浦百恵：大本教事件（内村祐之，吉益脩夫（監），福島章等（編）：日本の精神鑑定，pp.3-25，みすず書房，東京，1972）
4. 宮本忠雄：出口王仁三郎とその周辺．からだの科学，56：43-48，1974

【付言】

本論文の要旨は日本病跡学会第51回大会で発表した。